

或る日の夕方、スマホをかまっていた妻が頓狂な声をあげて「大変だあ！」と言うので驚きました。何事か訊ねると「一畑が閉店するんだって」と言うのです。

最近売場の規模が縮小されておかしいとは感じていましたが、まさか閉店するとは思いがたらなかったので確かに驚きました。妻の場合は特に、『一畑友の会』の会員になっていたから他人事ではなかったのです。閉店したらこれまでの積立金がどうなるか咄嗟に気になったに違いありません。

JR松江市駅前にある一畑百貨店閉店のニュースは、翌日の地方紙の一面に掲載されるほどの大事件でした。昔は殿町の県民会館（旧松江市公会堂）の近くにあり、還暦以上の松江市近隣住人にとっては思い出深い百貨店なのです。市内の様々な商店が栄枯盛衰を繰り返す中、この一畑百貨店だけは場所は変わらずに数多の量販店とは一線を画す老舗として六十五年の長きに渡り存続し続けたのです。

若い世代の中には、一畑百貨店なんか行く用がないからなぜ地元自治体を巻き込んだ大騒動になるのか理解出来ないという方も多いでしょう。多分、この感覚こそが閉店に繋がる原因の一つであろうと思わざるを得ません。暖簾に胡坐、その一面があった

ことは否定できないでしょう。かく言う私も、妻と二人で月に数回利用する程度で、大抵買物をする売場は決まっています。あまり熱心な客ではありませんが、やはり閉店したら寂しいという思いは少なからずあります。

私にとって子どもの頃の一畑百貨店での最大の思い出は、殿町にあったときの大食堂での家族揃っての食事です。一つのフロアを占領した正に昭和のデパートの大食堂！でした。ショーケースを眺めてメニューを決めてから食券を買い求め、大きなテーブルに座ります。各テーブルの上には水玉模様の土瓶と茶碗が置いてあるので、自分でお茶を注いで料理を待つ時間が好きでした。私のお気に入りのメニューは『一畑ラーメン』でした。肉と野菜の入った餡かけ風のラーメンだったと記憶しています。あの頃の賑わいが懐かしくて仕様がありません。

閉店の発表後に訪れた一畑百貨店はいつもより人が多く感じました。普段は年配のお客さんが多い店内には珍しい親子連れの姿がチラホラありました。が、きつと閉店と聞いて足を運んだに違いありません。今の一畑には子供をワクワクさせる物一つもありませんが・・・「散る一畑 昭和は遠くになりけり」お粗末。

空き家 14 木幡智恵美

生家の思い出①

生家の登記権利証書は現在、私名義になっている。保存してある証書で一番古いのは、祖母が所有者だ。祖母は母の伯母で、子宝に恵まれなかった。母の実母には七人の子（末妹は夭折）がおり、下から三番目の母が成人してからこの家に養女に入ったのだ。その祖母名義の間に、父が事業を興し、銀行からお金を借りるため、家を抵当に入れた。祖母が亡くなった後、父の事業はオイルショック後立ち行かなくなり、失意のうちに父は他界。母はこの家を残すために借金を払い続け、家政婦として働いていた家で倒れた。命を懸けて守り続けた母の思いを身に染みて感じる私が家の所有者になった。それなのに、生家はだんだん朽ちつつある。今のうちに、思い出せることは記しておかねば。

明治生まれの祖母が、今の家よりさらに海に近いところにあった元屋敷から、新しく建った家に移ったのは大正の頃かと思われる。桶屋をしていた夫が亡くなって自分が家の主となり、養蚕で生計を立てていた。私は一歳過ぎて大阪の泉南に父母と移ったので、ずっと一緒に暮らしていたわけではない。帰省した際には天井まで蚕棚が積まれていたのを覚えている。帰る度に出してくれる祖母の料理は、鯛のほぐし身入りのちらし寿司。私はちよつとうんざりだった。高くて黒い天井から垂れた一本の裸電球の下で、ちやぶ台を囲み食べたものだ。祖母は大柄な身体をゆすらせて、ほとんど歯の抜けた口で大笑いをし、細身で障がいのある伯母も、これまた歯の抜けた口を歪めながら微笑んでいた。

その頃の便所は庭の掘って建て小屋の中にあつた。開き戸を引くと、地面の土に穴が掘ってあり、その上に板が二枚置かれていて、その板にまたがって用を足すのだ。男性の小用は桶にそのままだったような気がする。横には肥桶（こえたご）が置いてあって、穴に溜まると柄杓で掬って二つの肥桶に汲み、天秤棒で担いで畑に運んで撒くのだ。

便所で嫌だったことが二つ。夜、真つ暗な中を小屋まで行かねばならないこと。必ず母か祖母に付いてもらった。もう一つは紙。新聞紙で拭くと、パンツが黒くなってしま

30代フリーター 6月25日夕方、JR新宿駅で「男が電車内で刃物を振り回している」という情報が伝わり、乗客が車内やホームを逃げ惑う騒ぎがあった。料理人の男性がうたた寝をしているうちに、布巾に包んで手に持っていた包丁が落ち、はずみで刃が見えたため、それを見た乗客が逃げ出したのがきっかけだった、と報じられている。年金生活者 逃げ出した乗客は、だれかがその刃物で切りつけてくるかもしれないと感じたと推察される。だが、それはだれかの手に握られていたわけでも、振り回されていたわけでもない。刃物というモノはあるが、コトは何も起きていなかった。

逃げ出した乗客らには、電車内ではいつ犯罪が起こるかかわからないという、潜在的、顕在的な恐怖心が常にあり、刃を見たときにそれが破裂したと考えることができる。30代 そうした恐怖心を生んだ直接の原因は過去に電車内で起きたいくつかの事件だろう。

やかさに向かう。しかも「穏やかになる」のは自分だけでなく、「みんな」が想定されている。そうした心の構えが表情や動作などを通して周りに伝わり、その心を穏やかにすることはあり得ると思う。この言葉は日本国憲法・前文の「平和を愛する諸国民の公正と信義に信頼して」に似ている。それは「諸国民の公正と信義」が存在しているから「信頼」するのではなく、それを生み出すために「信頼」する覚悟をしたという宣言だ。それが戦後世界の「見えない抑止力」となった。30代 ロシアがウクライナ侵略をやめず、中国が軍拡を続け、それに対抗する西側諸国が軍事費を膨らませる現在の世界に向けて「みんなの心が穏やかになる」に匹敵するような外交の言葉を日本国は発することができないだろうか。年金 すぐに思い出すのは吉本隆明の「日本人が保持し、世界に向けて呼びかけるべきは、やはり九条の『平和主義』」ではないでしょうか」という発言だ

年金 刃物で切りつけられるかもしれないとか、爆発物をしかけられるかもしれないといった凶悪犯罪への恐怖心だけではない。むしろそれは少ないだろう。たいていは、バッグをぶつけられるのではないか、足を踏まれるかもしれない、体を押されそうだと、いったことを乗客の多くは恐れていると推察される。

それは私たちの社会で「万人の万人に対する冷戦」が続いていることを示している。資本主義の高度化がもたらした消費の過剰化が、国家の権力の一部を個人に分散させ、それを手にした諸個人が相応の処遇を他者に求め始めた結果だ。

30代 乗客どうしが互いに恐れ合っている。年金 そのストレスから免れるために、私は電車に乗るときや雑踏を歩くときは「みんなの心が穏やかになる」という言葉を頭の中で唱えるようにしている。これは恐れをかなり消してくれる。その緊張が解けると、こちらも

（『文藝春秋』2011年4月号）。彼はその前段でこう語っている。

『平和主義』の理念を根本に据えれば、日本に何かと軍事的な協力を求めてくる米国に対しても、武力を背景に圧力を加えてくる中国に対しても、モノが言えるはずです。『私たちは国際紛争に武力を持ち出さないと憲法で宣言しているのだから、あなたの国もそうして、私

周りをゆとりをもつて見ることができるようになり、ぶつかられたり、押されたりしないための動作ができるようになる。

実際にぶつかられたり、押されたりしたときも「みんなの心が穏やかになる」を頭の中で繰り返すと、少なくともその間は仕返しに押し返してやろうかといった気持ちを抑えることができる。

30代 ジイさんがその言葉を思いついたのか。

年金 メンタルヘルスのハウツー本（大嶋信頼『小さなことで感情をゆさぶられるあなたへ』）にあつた言葉だ。緊張を感じたとき唱えようと、自分だけでなく、周りもイライラしたり怒ったりしなくなるから、と著者は薦めていた。

言葉は対象を指し示すだけでなく、それを発する側、受け取る側の心の位置と向きを決める。たとえ頭の中だけであっても、「みんなの心が穏やかになる」と唱えれば、それに相応する心の位置と向きが定まる。つまり心は穏

たちと平和的な同盟を結びましょう」と呼びかければいいのです」

ロシアも中国も西側も互いに「向こうが戦争を仕掛け、向こうが軍拡をしているのだから、戦わざるを得ないし、軍備も増やさなければならぬ」と主張しているいま、「平和同盟」など相手にされないように見える。しかし、ウクライナの戦争のエスカレートや、中国と西側諸国との軍事的な衝突の危険をはらむ現在の世界の緊張状態を緩めようとするなら、それは力の増強によつては不可能だ。それどころか緊張をいつそう高める。残る手段は言葉しかない。言葉は緊張を強めることもできるが、緩めることもできる。

口で言っても聞く耳を持たない国がある以上、どうしても武力の備えが必要になるというのが安全保障や国際政治の専門家の決まり文句だ。確かに言葉は万能ではない。それは武力も同じだ。違うのは武力は緊張を緩めることができることだ。言葉はそれができる。

ニュース日記 884
中村 礼治

言葉と武力